

# 千波湖御猟場について

## ―風致保存のための御猟場の誕生―

吉岡 拓

### はじめに

近代日本では、「御猟場」と呼ばれる皇室の狩猟場が、北は宮城から西は京都に及ぶ地域に設置されていた。その数は、廃止後の再設定や鴨場という特定種の猟場も含めると、合計で二二に及ぶ。しかし、多くの御猟場は、大正期に廃止となり、現在まで存続しているのは、埼玉鴨場と新浜鴨場の二つにすぎない。<sup>①</sup>なぜ御猟場は設置され、廃止されていったのか。この点を検討することは、戦前日本の天皇・天皇制の有り様を地域の視座から解明していく上で有用な作業になると考える。

御猟場についての研究は、比較的史料の残存状況の良い地域の御猟場を主な事例に、宮内庁宮内公文書館が二〇一四年度よりはじめた地域博物館・文書館との共催展示<sup>②</sup>にも触発されながら進んできた。現状で一定の研究の蓄積があるのは、明治十四年（一八八二）に千葉県に設置された習志野原御猟場<sup>③</sup>、同十五年に神奈川県（のち東京府に編入）

に設置された連光寺村御猟場<sup>④</sup>、同十六年に東京・千葉・埼玉の一府二県にまたがって設置された（のち、東京府区域は解除）江戸川筋御猟場の三つである。

これらの御猟場は、御猟場の歴史の中でも最も早い時期に開設されたものであり、また、東京都市部に近い場所に設置されたことから、実際に天皇や皇族、政府要人によって利用されるなど、御猟場の同時代上の役割を検討する上で重要な事例であることは、論をまたない。しかし、冒頭で述べた通り、御猟場は右の三つに限らず、宮城から京都までの各所に設置されており、明治三十年代には、当時台湾総督府民政長官であった後藤新平から、台湾への設置を打診されたこともあった。<sup>⑤</sup>皇族や政府要人の利用が困難であろう地域にまで御猟場が設置されたのは、一体なぜなのか。これらの御猟場は、どのように管理され、またいかなる理由によって廃止されたのか。御猟場の歴史的位置の把握は、東京近郊以外の御猟場の検討も含めて行うことで、はじめて可能になるのである。<sup>⑦</sup>

そこで、本稿では、上記の課題に対する一つの取り組みとして、明

治十六年に茨城県東茨城郡水戸地域に設置され、同二年に廃止された千波湖御猟場について検討していきたい。先述した習志野原・連光寺村・江戸川筋の三つの御猟場とはほぼ同じ時期に設置された千波湖御猟場は、その三つの御猟場がいずれも大正期以降まで存続する中、わずかに五年で廃止されてしまう。また、水戸という、東京都市部からは離れた地域に設置されたのも、三つの御猟場には見られない特徴であった。しかし、この短期間での廃止と東京遠方への設置という両点は、その後に設置されていく御猟場の多くに共通する特徴であり、その点で、千波湖御猟場の設置・廃止の経緯を追うことは、御猟場の歴史研究を行っていく上で重要な意味を持つと考える。

以下、本論では、まず千波湖御猟場の設置を考えるための前提として、天皇の遊猟場の設置主体が内務省から宮内省へと移り、その結果として、遊猟場が「御遊猟場」から「御猟場」へと再編されていくのを確認する。その上で、千波湖御猟場の設置・廃止の経緯について検討することで、千波湖御猟場が、地域からの風致保存の要請への対応という、御猟場本来のあり方とは異なる目的で設置され、やがて、宮内省の側でもそれを目的とした御猟場設置の意義が共有されていく様子を、あきらかにしていきたい。

なお、千波湖の呼称は多様で、文書上では「仙波湖」「千波沼」「千湖」などとも表記されるが、本稿では引用史料以外はすべて「千波湖」で統一する。

## 一、「御遊猟場」から「御猟場」へ

まずは、主として関東地域にいくつかの「御遊猟場」が誕生し、そ

れら「御遊猟場」が宮内省により「御猟場」として再編されていく経緯について確認していく。

明治十一年六月二十八日、内務卿伊藤博文より埼玉県・千葉県・神奈川県・群馬県に宛てて、「御遊猟場」の候補地選定の依頼がなされた。<sup>8)</sup>【表二】は、この時の依頼に対する各府県から内務省に提出された候補地をまとめたもの、【表二】は、内務省による選定を受けて、明治十五年五月までに決定された「御遊猟場」を一覧したものである。両表を見比べてみると、府県が候補地としてあげてきた場所と、内務省が候補地として選定した場所とが、必ずしも一致していないことがわかる。「御遊猟場」設置は、地方や宮内省からの要請ではなく、内務省のイニシアティブの下で進められた、といえる。

ところで、既に述べている通り、この「御遊猟場」とは、「御猟場」と同義のものではない。両者の違いを確認しておくこととする。

十四年四月、千葉県内に存在した陸軍の演習場（習志野原）<sup>9)</sup>を利用し、他地域に先駆けて「聖上御遊猟場」が設置された。その後、この「聖上御遊猟場」の中に「鳥獣畜養地」を設置することが議論される。その関連文書の中に、次のような記載がある。<sup>10)</sup>

陸軍卿へ御照会案

千葉県下御遊猟場内鳥獣畜養地<sup>即チ</sup>聖上御猟場之義ハ、当分貴省御所轄習志野原之内ニテ被相設度候間、御差支も無之候ハ、追テ場所并町歩等取調可申入候条、兼而其筋へも御達置有之度、此段及御照会候也

明治十四年七月廿八日

陸軍卿宛

宮内卿

割注、ならびにその前後の記述に注目したい。「即チ聖上御猟場」と

【表一】明治 11 年内務省照会に対して各府県から回答された遊猟場候補地一覧

府県	場所	面積
東京府	南葛飾郡亀戸村ほか 7 か村の内 荏原郡池上村の内 千束池 荏原郡池上村の内 東多摩郡中野村の内 字桃園 北豊島郡上石神井村の内 東多摩郡下井草村の内	217 町 7 反 14 歩 93 町 8 反 6 畝 28 歩 63 町 7 反 3 畝 17 歩 18 町 5 反 8 畝 16 歩 44 町 7 反 7 畝 12 歩 38 町 3 畝 15 歩
神奈川県	武蔵国多摩郡百草村ほか 16 か村 武蔵国多摩郡元八王子村ほか 4 か村 武蔵国多摩郡御嶽山ほか 3 か村 相模国高座郡相模原上鶴間村ほか 8 か村 武蔵国久良岐郡金澤富岡村ほか 9 か村	1759 町 5 反 6 畝 28 歩 1852 町 9 反 8 畝 26 歩 1452 町 6 反 2 畝 19 歩 1748 町 5 反 6 畝 23 歩 1757 町 4 反 5 畝 23 歩
埼玉県	武蔵国葛飾郡彦倉村ほか 79 か村 武蔵国埼玉郡八條村ほか 27 か村 武蔵国足立郡美女木村ほか 2 宿 15 か村 武蔵国足立郡川口町ほか 1 宿 7 か村	4008 町 2 反 3 畝 23 歩 2311 町 5 反 7 畝 23 歩 2225 町 3 反 1 畝 10 歩 1438 町 3 反 2 畝 26 歩
千葉県	下総国葛飾郡国府台ほか 45 か村	東西およそ 2 里南北およそ 2 里あまり
群馬県	上野国邑楽郡城沼	周囲およそ 2 里

『自明治十二年至同十五年 猟場録 主猟寮』より筆者作成

【表二】明治 15 年 5 月までに決定された「御遊猟場」

所在地	東西	南北
群馬県利根郡	12 里 18 町	8 里 27 町
埼玉県秩父郡	11 里半	6 里半
栃木県上都賀郡	8 里半	13 里半
神奈川県南多摩郡	6 里 4 町	3 里 12 町
神奈川県足柄下郡	6 里 12 町	4 里
静岡県天城山官林内	4 里	20 里

『自明治十二年至同十五年 猟場録 主猟寮』より筆者作成

人臨時特許規則」が設けられることとなった。

【表二】で確認した、神奈川県南多摩郡一体に設置された「御遊猟場」(実際には都築郡黒川村も含む)についても、宮内省は同様の対応を取った。各府県の「御遊猟場」選定が正式に発表される直前の五月初旬から下旬にかけて、宮内省は神奈川県と協議を行い、「御遊猟場」のうち連光寺村ほか九か村の区域を銃猟禁止にすることを決定し、さらに八月になると、この区域内での狩猟自体を禁止している。この狩猟禁止となった区域が、後述するように、翌十六年に「連光寺村御猟場」と命名されるのである。

以上のように、宮内省は、内務省が設定した「御遊猟場」の一部を禁猟区域とし、その区域を「御猟場」と呼んで、「御遊猟場」とは区

いう言葉がかかるのは、「千葉県下御遊猟場」ではなく、その内部に設置しようとしている「鳥獣畜養地」である。つまり、この文書では、狩猟の場である「御遊猟場」と、畜養のための場(天皇などの限られた人々だけが狩猟が許される場)である「御猟場」とが、厳密に区別されているのである。最終的に「習志野原中統テ右畜養地」と決定され、十六年三月に「千葉県下御遊猟場規則」が改正された際には、別途「習志野原御猟場外国

別しようとしていた。宮内省側のこの対応の背景にあったのは、皇室の狩猟場に対する内務省との見解の相違である。

内務省は、「御遊猟場」の運営について、人民の生活を考慮し、「先ツ当分ノ内ハ御遊猟場ハ名ノミニシテ何等禁令ヲ設ケス、行幸ノ節ハ御禁輦前何日間人民ノ銃猟ヲ禁スル旨其時々県庁へ相達<sup>14</sup>」という穏当な方法を取ることを宮内省に提案していた。

一方、宮内省は、文書上では内務省の方針に同意していたものの、<sup>15</sup> 天皇の現地への行幸を想定し、畜養ノ禁猟区の設定に固執していた。連光寺ほか九か村を禁猟区としたのは、ほかならぬ明治天皇自身の意志を尊重した結果であったし、<sup>16</sup> 十六年五月初旬に宮内省の要請で東京府・千葉県・埼玉県にまたがる地域に設置された「聖上御遊猟場」(のちの江戸川筋御猟場)<sup>17</sup> が、設置当初は行幸の際のみ狩猟禁止と定めていたところ、同月下旬までに銃猟が常時禁止となり、さらに八月には鳥獣全般の禁止に至ったのも、天皇が行幸した際の不猟を、宮内省が懸念したためであった。<sup>18</sup>

右のような動きの中で、十六年七月、各地の「御遊猟場」の中で禁猟区となった三つの区域、そして次章で検討する茨城県東茨城郡の千波湖周辺地域が、それぞれ習志野原御猟場、連光寺村御猟場、江戸川筋御猟場、千波湖御猟場と命名される。その起案文書の末尾には、「群馬県下外四県へ跨ル御猟場ノ義ハ当分名称ヲ不附」と朱書されていた。<sup>19</sup> 「跨ル」とあるのが気になるところであるが、宮内省から内務省へ「曾テ御省ニ於テ御調製相成候静岡岡県下ヨリ東方之諸県及東京府下等ニ於テ御遊猟場御取調相成候絵図面」の提供を求める同月付の文書が存在するので、<sup>20</sup> 「跨ル」は誤記ないし誤解で、「群馬県下外四県へ跨ル御猟場」とは群馬県ほか四県に設置された「御遊猟場」(先掲の【表二

で示したもの)のことを指しているのであろう。「当分名称ヲ不附」とあることから、おそらく宮内省は、この段階ではすべての「御遊猟場」を漸次「御猟場」に切り替えていくつもりであったと考えられる。事実、栃木県上都賀郡に設置された「御遊猟場」は、十七年二月に鳥獣猟禁止となり、七月に区域を拡張した上で、八月に「日光御猟場」と命名されたのである。<sup>21</sup>

庶務課に設置されていた「御遊猟場御用掛」は、十六年九月までに「御猟場御用掛」となり、さらに十七年一月には「御猟場掛」へと改組され、庶務規程が制定された。そして、十七年八月、宮内省から内務省に次の通達がなされる。<sup>24</sup>

各地方御遊猟場之儀、本年一月中、当省内ニ御猟場掛ヲ設置以來ハ遊ノ字ヲ不用シテ某御猟場トノミ政府ヘモ上申、且御省ヘモ及御文通候所、御省ニ於テハ尔今御遊猟場ト其地方庁ヘ御達、又ハ当省ヘ御文通モ有之候得共、右遊ノ字、爾来不相用候様御承知相成度、此段及御照会候也

明治十七年八月廿一日

宮内少書記官 高辻修長

内務書記官御中

宮内省は、御猟場掛の改組を根拠に、今後は「御遊猟場」ではなく「御猟場」と記載するよう内務省に求めた。ただ、【表二】の「御遊猟場」すべてが御猟場に変更されたわけではないことを踏まえると、これは単なる呼称の変更ではなく、事実上の「御遊猟場」廃止の通達であり、皇室の狩猟場の設置・廃止のイニシアティブが、この段階で内務省から宮内省へ完全に移動したことを示すものであったといえよう。



## 二 千波湖御獵場の設置

前章でも触れたように、千波湖御獵場が設置されたのは、宮内省が「御遊獵場」の中に禁獵区である「御獵場」を設定し、かつそれらに個別の名称を定めようとしていた時期のことであった。ただし、千波湖御獵場は、名称決定以前に「御遊獵場」と定められていたわけでもなければ、江戸川筋御獵場のように、宮内省の要請によって新たに設置されたわけでもない。以下に、その設置経緯を検討していくこととしよう。

千波湖への「御遊獵地」設置が検討されるようになったのは、明治十六年に茨城県令であった人見寧から香川敬三へ送られた、一通の書簡がきっかけであった。<sup>26</sup>

拝啓 春寒料峭御起居益御清穆奉賀候、過般ハ花瓶彫刻料之義ニ付、及御内議候処、速ニ許可相成、重畳御手数ヲ煩シ鳴謝之至ニ不堪候、扱曾而御承知ニモ有之候半、当県下仙波湖之義、往時ハ魚鳥獵相禁シ置候趣之処、置県以來其禁ヲ解キタルヨリ、僅々タル納税ヲ以テ漁獵受負、許可ヲ得タル者ハ四時ノ別ナク自由ニ兩業ニ従事候ヨリ、輒近ニ至テハ栖鳥年々相減シ、為ニ雜草益繁茂、従テ水量大ニ相減シ、漸ク湮埋ニ就クノ患相見申候、抑モ仙湖ノ儀ハ偕楽公園ニ於ケル風致必須之佳境ニ之レアリ、右様水量并ニ栖鳥ヲ減シ候テハ美景ヲ失ヒ甚タ可惜、且灌溉水利ヲ失スルノ懼レモ有之、旁以テ自今兩業トモ断然禁止、千葉県等ノ例ニ拠リ朝廷御遊獵地ニ被相定度、左候ハ、魚鳥モ蕃息、従前之風致モ保存可致ト存候、高案如何敢テ御異議モ無之候ハ、宜ク御取計相

成度、宮内卿迄意見上申候方可然トノ御見込ニモ候ハ、更ニ具申可致、其辺之処モ一応御内示ヲ煩シ度、此段匆々不一

十六年二月廿七日

人見茨城県令

香川宮内少輔殿

千波湖は、旧幕時代は魚鳥の獵が禁止されていたが、廃藩置県後に僅かな納付金で獵が許されるようになった結果、徐々に鳥数が減少し、そのために湖面には雜草が生い茂り、水量も減ってしまった。このことは、偕楽園の風致を損い、また、周辺住民の農業にも多大な影響を及ぼすものであるため、今後は千葉県などの例にならって「朝廷御遊獵地」に定めてもらうことで獵を禁止とし、再び魚鳥を繁殖させたい。

人見は、かかる理由から香川へ千波湖の「御遊獵地」設定を訴えた。「御遊獵場」にせよ「御獵場」にせよ、その設置の第一義的な目的は、狩獵である（御獵場が禁獵とされたのも、天皇の狩獵のためであった）。しかし、この書簡の中で人見が述べる「朝廷御遊獵地」設定の目的は、「偕楽公園ニ於ケル風致必須之佳境」である千波湖の保存のためであった。地方長官は、明治十六年の時点では狩獵・漁業の禁止区域を設定できる立場にない。<sup>27</sup> 人見は、千波湖を禁獵区とすることで魚鳥が繁殖し、それにより千波湖の美觀を回復させられると考え、「朝廷御遊獵地」への編入を訴えたのである。

人見が香川に相談したのは、香川が宮内少輔という地位にあることに加え、水戸藩出身であったためであろう。果たして、香川は人見の構想に「至極御尤之義」と賛意を示し、千波湖およびその周辺の村を記した図面を沿えて宮内卿宛に上申すること、千波湖の隣接地域で鳥類が棲息する場所があれば遊獵場区域内に加えた方がよいことなどを助言した。<sup>28</sup> 人見は、要請の実現に向けて、香川という強力な後ろ盾を

得たのである。

香川の助言を踏まえ、人見は四月十二日付で上申書を宮内大臣徳大寺実則に提出した。<sup>29)</sup>

凡ソ園池ノ勝トスル所、山水ノ明媚ヲ要スルハ論ヲ待タス、躍魚栖鳥モ亦其明媚ヲ助クルノ景致トス、是以テ靈台ノ篇於物魚躍白鳥鶴々等ノ語アリ、則チ當ニ當時景勝ノ致見ツヘキノミナラス、聖沢ノ浹洽併セ徴スヘシ、然則景勝ノ微觀ト雖トモ時アリテハ施治ノ得失ニ関セスト云フヘカラス、則チ之ヲ度外ニ措クヘケン、当県下常陸国東茨城郡仙波湖之儀ハ、水戸城ノ南ヲ周リ、偕楽園ノ東ニ控ヘ、尤モ攬勝ノ一区ナリ、是以テ古來魚鳥獵相禁シ置候趣ノ処、置県以來他一般池沼ニ準シ其禁ヲ解キシヨリ、僅僅タル納税之カ許可ヲ得タルモノハ其時期ニ拘ハラス自由ニ兩業ニ従事候ヨリ、近年ニ至テハ魚鳥年々相減シ、今ハ只濯々鶴々ノ壯觀ヲ失候ノミナラス、為ニ雜草湖面ヲ掩ヒ、水量大ニ相減シ、漸ク湮埋ニ就クノ患有之候、右仙湖ハ偕楽公園ニ対シ風致必須ノ佳境ナルニモ拘ハラス、今ハ前述ノ如ク其壯觀ヲ失ヒ、且併セテ灌漑水利ヲ失スルノ懼レモ有之、因テ其保全ノ方ヲ講スルニ、千葉県等ノ例ニ拠リ朝廷御遊獵地ニ被相定候ハ、只古蹟ヲシテ永ク保存セシムルノミナラス、從テ灌漑水利ノ便、公園覽眺ノ勝ヲモ保全候儀ト被存候、果シテ右様御定ニ相成候ハ、當ニ山水ノ明媚ヲ増シ候ノミナラス、聖徳ノ化、魚鳥ニ孚及シ、於物魚躍ノ状、鶴々ノ色モ亦大ニ觀ツヘキアラントス、右等ノ処、宜ク御亮察、至急御決定相成度、略図相添、且御参考ノ便ニ供セン為メ図上朱点ヲ以テ之ヲ画シ、此段内申候也

明治十六年四月十二日

茨城県令 人見寧〔印〕

#### 宮内卿徳大寺実則殿

上申書の中盤「是以テ古來魚鳥獵相禁シ置候趣ノ処：且併セテ灌漑水利ヲ失スルノ懼レモ有之」の箇所は、先に引用した香川宛書簡中の記述をほとんどそのまま転載しており、その前後の箇所が、新たに書かれた内容である。転載前の箇所では、「偕楽園」の名称の由来となったことで知られる『孟子』の梁惠王章句の一節を引きながら、景勝地の維持保存と政治の関係性が語られ、後の箇所では、やはり梁惠王章句を意識しながら、千波湖を「朝廷御遊獵地」とすれば聖徳が自然にまで及んでいく、とした。故事の中から王政と自然との関係を示すことで、風致保存のために「朝廷御遊獵地」へ編入することの意義を強調しているのである。なお、末尾に書かれた「略図」については、後に改めて見ていくこととしたい。

五月二一日に宮内省から太政官へ御獵場選定の上申がなされ、六月十二日に千波湖周辺への御獵場設置が許可された。その際、太政官第二局が作成した指令案のカガミには、「御獵場ノ義ハ内務省へも協議相済、殊ニ地方庁ニ於テモ支障無之趣主任官ノ申出候ニ付」と記されている。<sup>31)</sup> 実際の経緯と異なり、形式上はあくまでも宮内省側の要請で御獵場が設置されたこととなっているのが興味深い。

六月の許可を経て、先述の通り、七月に千波湖およびその周辺地域が「仙波湖御獵場」と命名される。ただ、この後、千波湖御獵場の運営のあり方について、宮内省と内務省との間で漁業の禁止をめぐる議論があり、内務省から茨城県へ千波湖御獵場の設置が通達されるのは、翌十六年十二月まで待たねばならなかった。次に、この点について確認しよう。<sup>32)</sup>

御獵場設置にあたって、千波湖での狩猟・漁を禁止にしたいとの要

求が宮内省から内務省へ照会されたのは、六月二三日のことであった。内務省は、七月七日付の文書で「魚獵禁止之義ハ御猟場区域内一般ハ實際施行難致場合モ可有之」と返答、それを受けて宮内省は同十三日付の文書で「魚漁之義ハ千波湖ニ限り禁止候様致度」と返答し、漁の禁止区域を千波湖に限定する形で対応しようとした。しかし、内務省側が危惧していたのは千波湖での漁禁止のことだったようで、十月四日付の宮内省宛文書では「從來該湖内魚獵ヲ以テ生業トスル人民モ有之、實際施行ハ困難之場合モ可有之」と述べ、改めて漁禁止についての疑問を呈した。内務省の主張は、前章で見た「御遊猟場」運営についての同省の方針と一致している。

これに対し宮内省は、以下の文書を内務省に送付し、千波湖を漁禁止にする必要を改めて強調した。

（前略）右魚獵禁止之儀ハ、實際施行困難之場合モ可有之旨ヲ以云々御協議之趣致承知候、然ルニ仙波湖之義ハ、該県下名勝ノ一区ニシテ、古来魚鳥獵禁制之場所ニ有之候処、置県以來其禁ヲ解キタルカ為メ、現今之景況ニテハ年々魚鳥相減シ、夫カ為メ偕楽公園ノ壯觀ヲ失ヒ、加フルニ灌漑水利ヲ失スル趣ヲ以、先般別紙之通（別紙欠・筆者注）該県令内申之次第モ有之、且右湖中魚獵ヲ禁セサレハ竟ニ鳥類繁殖ノ妨害ニモ相成、旁以顕前之通魚鳥獵禁止致度、此段御答旁申入候也

ここに見られる通り、宮内省側が漁禁止の理由として第一に強調したのは、先述の人見寧の主張と同様、偕楽園の風致の問題であった。既に運営されている三つの御猟場と比較した場合、区域を禁猟にする点では同じであるが、それが天皇の将来的な行幸を想定した上での対応ではないという点で、目的は全く異なる。宮内省は、風致保存という

【表三】各御猟場予算比較

御猟場名	17 年度	18 年度	21 年度
習志野原御猟場	944 円	888 円	2135 円
連光寺村御猟場	820 円	465 円	929 円
江戸川筋御猟場	1720 円	1315 円	2753 円
日光御猟場	1000 円	750 円	1390 円
千波湖御猟場	100 円	120 円	120 円

『自明治十五年至同廿一年 会計予算決算録 主猟寮』

（識別番号 21213）より筆者作成

※ 19 年度、20 年度は御猟場別の予算についての記載なし

人見寧の要請をそのまま受け入れ、内務省に漁の禁止を求めたのである。

最終的に内務省は、宮内省側の主張を受け入れ、同十二月六日、茨城県へ千波湖御猟場の設置と区域内の鳥獵禁止・千波湖内での漁の禁止を達達した。茨城県は、翌十七年二月、これを管内に布達する。<sup>(34)</sup> 千波湖御猟場は、設置決定から半年あまりを経てようやく正式に運営を開始したのである。

ここで、千波湖御猟場と他の御猟場の予算を比較したい。【表三】は、明治十七年、十八年、二二年度の各御猟場予算を一覧したものである。御猟場によって予算の差がかなり大きく、その中でも千波湖御猟場の少なさが際立つ。二二年度予算に至っては、各御猟場が十八年度に比べ二倍前後の増額がなされる中（二二年から御猟場区域内の住民へ手当金の下賜が開始されたことによる）、千波湖御猟場だけが二二〇円のみである。

なぜ千波湖御猟場は、かくまで低予算の中で運営できたのか。十七年六月十八日に作成された宮内省内蔵寮への達案のカガミに、その理由が端的に示されている。<sup>(35)</sup>

千波湖御猟場之儀、客年六月中御治定之節、鳥獵禁止相成候得共、

夫レカ為メ本省ヨリ別段監守人等ヲ不差置シテ、茨城県巡查ニ取締為致候儀協議済ニ有之候間、右巡查ニ慰勞手当金被下方并制札標木修繕費ニ相定候為メ、十七年度ヨリ一ケ年金百円ツ、ノ定額御支出相成度、内蔵寮へ御達案相添此段相伺候也

千波湖御獵場は、監守・見回人を置かず、巡查に御獵場内の取り締まりを行わせる方針が取られたのである。監守や見回人は、御獵場の管理だけでなく、行幸や侍従らの遊獵の際に、その事務手続きや御獵場区域内の案内を担う役割も追っていた。<sup>36)</sup>つまり、監守や見回人を置かないというのは、天皇の行幸はもろんのこと、皇族や政府要人の遊獵も想定していないことに他ならない。なお、他の御獵場では監守の役割などを定めた規則類がそれぞれ個別に定められていたが、千波湖御獵場は、監守規則はもろんのこと、御獵場規則も制定されなかった。千波湖御獵場が、既存の御獵場とは全く別種の目的―すなわち偕楽園の風致保存―から設置・運営されていたことが、これらの点からわかるであろう。

### 三. 千波湖御獵場設置要請の背景

前章で、千波湖御獵場が、偕楽園の風致保存のため、茨城県側からの要請で設置されたことを確認した。では、そもそもなぜ人見寧は、偕楽園の風致保存を求めたのであろうか。本章ではその点について検討していくこととする。

周知のように、偕楽園は、第九代水戸藩主の徳川斉昭が天保年間に開いた庭園である。千波湖は、園からの景観、あるいは、園に参観するための経路（開園にあたり船着場が設けられた）として、開園当初

から重要視されていた。<sup>38)</sup>

廃藩置県後の明治五年十一月、茨城県に大蔵大丞兼任のまま県令心得として出張した渡辺清は、茨城県官員と偕楽園で集会し、次のような説論を行った。<sup>39)</sup>

士民ノ党派アルヤ、正不正ヲ問ハス各其類ヲ援キ不類ヲ忌ミ、政途ノ障碍タル之ヨリ甚シキハナシ、故ニ曩ニ党派ノ弊ヲ絶タンコトヲ告諭シ稍其氣焰ヲ悛ルニ似タリ、然レトモ未タ共和諧樂ノ風ニ至ラス、夫レ烈公ノ偕楽苑ヲ設ケラル、ヤ士民ノ氣ヲシテ共和ナラシムルヲ要スルニ在ル耳、因テ今日烈公ノ廟下ニ会シ、其遺意ヲ続キ官員ヲシテ鬱塞ノ氣無ラシメ、管内党派ノ氣ヲ消滅シテ春風和氣ノ域ニ赴カシムルノ意ヲ示サント欲スルナリ、諸官員此意ヲ体セハ庶幾クハ公ノ尊靈ヲ慰ムルニ足ンカ

水戸藩では旧天狗党と諸生党、その中の諸派の争いが王政復古後も続き、さらにその抗争は、各々の家族、平民層までを巻き込むに至っていた。<sup>40)</sup>そうした中で渡辺清は、偕楽園が藩士のみならず城下の住民にも開放されていたのは烈公＝徳川斉昭が「士民ノ氣ヲシテ共和ナラシムル」ためであったとして、官員達に党派的な対立を控えるよう求めたのである。<sup>41)</sup>

渡辺は、翌六年三月に再び茨城県に出張し、党派の対立の解消を求める説論を二度にわたり行っている。その中で「廃藩ヨリ王政婦一ノ実始テ相立、政体日ニ開明、国勢月ニ進歩スルノ秋ニ相会シ、独リ此地ノミ党派依然相キシリアイ、争テ以醜態ヲ視ルコト果シテ何ノ心ソヤ、義烈両公在天ノ靈若知ルコトアラハ之ヲ何トカ謂ンヤ」と、徳川光圀（義公）と斉昭の二人の名を出して、党派への固執を諫めた。<sup>42)</sup>この説論を受けて、「元水戸県士民総代」六二名が「（党派対立の・筆者注）



悔悟ノ真意天地神明ニ誓ヒ、弥其和親睦、益朝意ヲ奉遵シ以テ開化ノ隆恩ニ奉報」ために「二公ノ為ニ神号」下賜を求める願書を渡辺に提出、渡辺がこれを太政官に執奏した結果、偕楽園好文亭内に設けられていた水戸光圀と斉昭の祠堂に「常盤神社」の神号が下されることとなった。<sup>43</sup>その後、祠堂を偕楽園東の位置に遷座させることとなり、神明造の社殿創建に着手、七年五月に遷宮式が行われた。<sup>44</sup>

右のさなかの六年七月、「人民輻輳ノ地」を「公園」とするべきことを定めた太政官布告第十六号（六年一月）に基づき、偕楽園が「公園」と定められた。太政官布告第十六号は、「旧来無税ノ除地（中略）其持主ヲ定メ有税地ト致シ候時ハ勝手ニ其花木ヲ伐採、田園ヲ開キ旧来ノ勝景ヲ失ヒ候」ことを危惧した大蔵省の正院への上申の結果、布告されたものであった。大槻功は、偕楽園の「公園」化を、旧藩時代の象徴である偕楽園を、常盤神社とともに保存するための処置であったとする。<sup>45</sup>適切な評価であろう。

以上のように、廃藩置県以降、士族を中心とした旧水戸藩市民の対立を解消するため、徳川光圀・斉昭という二人の旧藩主の名がしばしば持ち出され、その中で偕楽園と常盤神社が、両者への尊崇の念を喚起させるための場として位置づけられ、その保存が図られていった。民政上の必要から、旧蹟の保存が図られたのである。

偕楽園の「公園」化後、その維持管理は県の予算で賄われていたが、十一年の地方税規則施行で府県が支出すべき費目が定められた結果、県からの支出ができなくなった。<sup>46</sup>そこで、十六年に県庁官員で協議し、「各俸給の内幾分を募り以て修繕の料」として蓄え、また「楽寿会」なる組織を設け、「春秋二季職員好文亭に会して宴を開く」ことにしたという。<sup>47</sup>

一方、常盤神社も、社殿の造営を寄付で賄い、また、旧水戸藩領の村々で敬神会を組織して毎年の収穫物の一部を社に寄付し、その貸付の利米などを神社の運営に宛てるなどしていたようであるが、思うような成果があらなかった。<sup>48</sup>そこで、十一年に水戸徳川家の家令であった長谷川清が「漸次神社保存完全ノ地位ヲ永遠ニ占ムルノ端緒ヲ開カントスル」ために常盤講なる講の結成を呼び掛け、翌十二年十二月に開講式が実施された。十三年二月に發起人らによる最初の会合が常盤神社境内で開かれ、その後、何度かの会合を経て、会頭に徳川昭武を推挙し、講務を担う肝煎に四三名が就任した。<sup>49</sup>

人見寧が千波湖御獵場の設置を宮内省に要請したのは、以上のような形で偕楽園・常盤神社の保存法が模索されている最中のことであった。この点を踏まえて、千波湖御獵場の区域を【図一—】（これが、先掲の十六年四月十二日付徳大寺宮内大臣宛上申書中に記載されていた略図と考えられる）【図一—】から確認してみると、御獵場の北側の区域が、「新道」と呼ばれる千波湖中央部を南北につないだ道を境に、<sup>50</sup>その西側は湖岸を境界としつつ、<sup>51</sup>常盤神社の境内に通じる道のところから御獵場の範囲が北側に伸び、常盤神社と偕楽園（公園）とは偕楽園のこと）全域が御獵場の範囲に収まっていることに気づく。この不自然な御獵場区域の広がりこそが、人見が御獵場設定を要請した意図を何よりも示しているといえるであろう。御獵場設置の要請は、偕楽園・常盤神社保存の一環としてなされたものだったと考えられるのである。

なお、【図一—】に見られる、千波湖北側の土地で同じく御獵場区域に含まれた桜山、緑が岡であるが、桜山は徳川斉昭が当初開園を計画していた場所で、現在の場所に偕楽園が開園した際に桜が植えられ、



【図一】 千波湖御猟場区域



『公文録』明治十六年・第一六五巻・明治十六年五月～八月・宮内省より  
※点線が御猟場区域を示す

【図一】 偕樂園・常盤神社周辺部分を拡大したもの



一遊亭という休息所が設けられたという。明治六年に偕樂園が公園と定められた際、その付属地とされた。緑が岡は、徳川光圀が高枕亭という別邸を立てたことで知られた場所である。両地が御獵場に含まれたのも、偕樂園・常盤神社を維持保存するのと同じ目的によるものであったと判断できよう。

### 三、千波湖御獵場の廃止

人見寧の要請によって設置された千波湖御獵場は、明治十九年五月に人見の後任として茨城県令に就任した安田定則の時代に廃止された。次に、この点について見ていきたい。

二年五月、安田県令は次の文書を宮内大臣土方久元に提出した。<sup>54</sup>

#### 千波湖御獵場之儀二付上申

当県下東茨城郡千波湖御獵場之儀ハ、去ル十六年中、常盤村等ヲ以テ御獵場区域ト被定候得共、追年諸鳥減少、尚又千波湖西北岸ハ今般布設スル水戸鉄道線路ニ係リ、目下工事中ニ付、本年内ニハ落成ノ都合ニ有之候間、此時ニ至リ候ハ、汽笛又ハ進行車輪ノ響等ニ因リ益減少スルハ必然之儀ト被存、将又是迄一回ノ御遊獵モ無之、且ツ御用途御節約ノ折柄、多少御出費モ有之儀ニ付、寧口此際被廃止候方可然ト被存候、此段上申候也

明治廿一年五月十一日

茨城県知事安田定則「印」

宮内大臣子爵土方久元殿

千波湖御獵場設置後も鳥類は減少し続けており、近々水戸鉄道が開通するため、今後はさらに減少することが予想される。また、御獵場選定以来一度の御遊獵もないことから、経費節減の意味も含めて御獵場



を廃止したい——これが安田の主張であった。

とはいえ、既に見てきた通り、千波湖御猟場は、そもそも天皇や要人の遊猟を想定し設置されたものではない。鳥数については、顕著な繁殖が見られなかったのはおそらく事実であるが、設置からわずか四年で見切りをつけるのは早すぎる、ともいえる。安田の上申は、やはり水戸鉄道の開通が

御猟場に与える影響

を考慮したためであつたと見るべきであらう。

近年、「香川敬三関係文書」の中から発見された「水戸鉄道之趣旨及沿革」と題された文書によれば、安田は「茨城県二赴クヤ首トシテ該鉄道工事ノ計画ニ着意シ」、水戸鉄道会社設立の発起人となる飯村丈三郎、塙載と協議を重ねたという。<sup>(56)</sup> 鉄道敷設は安田の県令就任以来の悲願であり、事実、水

【図二】 水戸鉄道会社作成線路実測図  
(千波湖付近)



『公文類聚』第十一編・明治二十年・第三六卷・運輸門六・橋道三より  
※千波湖中央に引かれている線が線路

戸鉄道会社が請願した水戸―小山路線の敷設も、安田の強力なバックアップの下で実現している。<sup>(57)</sup>

【図二】は、その水戸鉄道会社が二十年四月頃に作成した水戸―小山間の線路実測図のうち、千波湖周辺の部分である。この図からあきらかなように、当初、線路は千波湖の湖面に敷き、のちに水戸駅が設置される場へとつなぐ計画であつた。この計画はいつの頃か変更され、最終的に線路は千波湖北側の湖岸沿いに敷かれることとなったが、その結果、偕楽園・常盤神社と千波湖の間が線路で分断される。<sup>(58)</sup> 水戸鉄道の敷設は、偕楽園と千波湖を一体のものとして風致の保存を図った人見寧の方針と相いれないものであり、それゆえに安田は、千波湖御猟場廃止の上申に踏み切つたのであらう。

偕楽園・常盤神社と千波湖が線路で分断されることに、その保存に尽力していた人々から批判は出なかつたのだろうか。明確なことはわからないが、水戸鉄道会社の発起人には、常盤講結成の呼びかけ人であつた長谷川清が名を連ねている。<sup>(59)</sup> 鉄道敷設は、少なくとも常盤神社の維持に尽力していた人々には「了承済みであつたと見てよいだらう」。

安田の上申を宮内省側も受け入れ、同三一日付で茨城県への千波湖御猟場廃止の通達を内務省に依頼、内務省からは六月十一日付で県にその旨が通達された。こうして、千波湖御猟場は開設から五年、実際に運営が開始されてからは四年という短い期間で、その歴史に幕を閉じたのである。御猟場区域に設置されていた標木や制札、それに千波湖内で使用していた船一艘は、その後、県内に払い下げられた。<sup>(60)</sup>

## おわりに

以上、本稿では千波湖御猟場の設置・廃止について、中央省庁での御猟場設置主体の変化（内務省から宮内省へ）や、旧水戸藩出身の人々の間に生じていた対立の問題と関連づけながら検討してきた。最後に、千波湖御猟場設置という経験が、その後の宮内省主猟局の活動に与えた影響について若干の指摘を行い、終わりに代えることとしたい。

千波湖御猟場が廃止された明治二年六月から、狩猟規則が制定される明治二五年十月までの間に、五つの御猟場が設置される。このうち、地域の側からの要請で設置に至ったのが、一三年設置の長良川筋御猟場（岐阜県郡上郡・武儀郡・方縣郡のうち）と、二五年設置の涌谷御猟場（宮城県遠田郡のうち）。設置は十月であるが、申請開始は八月の二つである。長良川筋が鶴飼業保護、涌谷御猟場が鴻雁繁殖保護を求めている要請であった<sup>(41)</sup>。天皇や皇族、政府要人による狩猟とは別目的での御猟場の設置が、千波湖御猟場廃止後も続けられたのである。

涌谷御猟場の設置後、同御猟場の管理方法について宮城県知事より照会があった。それをうけて主猟局長山口正定が宮内大臣・次官らに回覧した文書からは、千波湖御猟場の経験がこの御猟場の設置につながっていた様子が垣間見える<sup>(42)</sup>。

今般新設相成候宮城県下遠田郡涌谷御猟場之義ハ、地方人民ノ請願ニ依リ御猟場ト被定候ニ付、統テ取締上ノ義ハ警察署ヲ始メ郡役所・町村役場等ニテ注意可致筈ヲ以テ、別段監守長・監守等ノ職員無之候処、實際ニ於テ取締主任者無之テハ都合ノ次第モ有之趣ニ付、無給監守五人被差置度旨、別紙ノ通り該県知事ヨリ内

## 議有之候（以下略）

山口は、地方の要請で設置された御猟場である以上、その管理については監守などを置かず所管の警察や役所に任せれば良い、と考えていたのである。具体的な言及こそないが、それは千波湖御猟場で採られた管理法を踏襲したものにはかならなかった<sup>(43)</sup>。

以上は実際に御猟場が設置された事例であるが、このほか、二二年夏に熊本県が同県阿蘇郡での鶴の棲息地確保のために禁猟区設定を望んだ際には、宮内省は将来的な御猟場設定も含めて県官と協議している<sup>(44)</sup>。また、山口正定は、同年末に御猟場設置候補地の視察のために京都府に出張した際、鶴の生息状況確認のために同府綴喜郡八幡に赴き、同地を禁猟区に設定するよう京都府に要請したという<sup>(45)</sup>。後者は、地域の風致保存についての主猟局自体の主体性を予想させるものであろう。

池田さなえは、明治二十年代前半（主として品川弥二郎局長時代）の宮内省御料局が、政府の国土保全行政を代替・補完しようとする動きを見せていたことを指摘している<sup>(46)</sup>。人見寧の要請で千波湖御猟場が設定され、同御猟場廃止後も伝統漁法や鳥類の保護のための活動を継続した宮内省主猟局の活動は、奇しくも御料局が国土保全行政の代替・補完を志向していた時期と重なる。これは、単なる偶然なのか、はたまた、二十年代前半の宮内省で局を越えた潮流として存在したものだったのか。今後の検討に期したい。

## 註

(1) 戦前から戦後までの御猟場設置・廃止の概要については、橋場万里子「全国における御猟場の変遷と連光寺村御猟場」〔『パルテノン多摩』博物館部門〕年報・紀要「五、二〇〇二年」参照。

(2) 御猟場関連では、二〇一四年四月～七月実施の公益財団法人多摩市

- 文化振興財団・宮内庁宮内公文書館共催展示「みゆきのあと—明治天皇と多摩—」(二〇一七年九月—十二月実施の千葉県立図書館・宮内庁宮内公文書館共催展「皇室がふれた千葉×千葉がふれた皇室」、二〇二二年七月—九月実施の春日部市・春日部市教育委員会・宮内庁共催企画展「明治天皇と春日部—巡幸・御猟場・梅田ごほう—」の三展示が開催されている(二〇二二年十二月現在)。
- (3) 天下井恵「習志野原御猟場と鎌ヶ谷市域」(『鎌ヶ谷市史研究』十八、二〇〇五年)、同「習志野原と鎌ヶ谷」[補足]明治天皇の習志野原賜名」(『鎌ヶ谷市史研究』二十、二〇〇七年)、辻岡健志「御料牧場・御猟場・鴨場—明治期における皇室と千葉県の関係史—」(『千葉県の文書館』二二、二〇一七年)。
- (4) 前掲橋場「全国における御猟場の変遷と連光寺村御猟場」、清水裕介「連光寺村御猟場再考—利用実態の分析より—」(『バルテノン多摩博物館部門研究紀要』十二、二〇一四年、同「連光寺村御猟場日記を読む—明治一七年—二八年—」(多摩市文化財調査資料六 連光寺村御猟場日記 明治一七—二八年」(多摩市教育委員会、二〇一六年、所収)、同「連光寺村御猟場日記を読む—明治一九—四一年—」(多摩市文化財調査資料七 連光寺村御猟場日記 明治一九—四一年」(多摩市教育委員会、二〇一七年、所収)、同「明治初期の遊獵文化と『御猟場』」(松尾正人編『近代日本成立期の研究 地域編』(岩田書院、二〇一八年、所収)、辻岡健志「連光寺村御猟場の公文書」(『公益財団法人多摩市文化振興財団・宮内庁宮内公文書館共催展示図録 みゆきのあと—明治天皇と多摩—」(公益財団法人多摩市文化振興財団、二〇一四年、所収)、拙稿「連光寺村御猟場と鮎漁」(前掲「多摩市文化財調査資料七 連光寺村御猟場日記 明治一九—四一年」所収)など。
- (5) 重松正史「江戸川筋御猟場問題」について—日露戦後地方政治状況に関する一考察—」(『地方史研究』一五八、一九七九年)、中西啓太「地域問題における地方行政機構と有力者層—江戸川筋御猟場問題」の分析から—」(『埼玉地方史』六七、二〇一三年)など。
- (6) 『自明治廿六年至同廿八年 猟場録 主猟寮』(識別番号1534)。なお、本史料を含め、識別番号を示した文書はすべて宮内庁宮内公文書館所蔵のものである。
- (7) なお、近年、明治三十八年に京都府愛宕郡に設置された京都御猟場関連の文書を含んだ「波多野六之丞家文書」の整理が京都府立大学学文学部歴史学科文化情報学研究室によって進められ、その成果が『京都府立大学文化遺産叢書第十九集 京都雲ヶ畑・波多野六之丞家文書調査報告』(京都府立大学文学部歴史学科、二〇二〇年)としてまとめられている。
- (8) 前掲清水「明治初期の遊獵文化と『御猟場』」。「自明治十二年至同十五年 猟場録 主猟寮」(識別番号1538)。
- (9) 習志野原の「聖上御遊獵場」設置の詳細については、前掲天下井「習志野原御猟場と鎌ヶ谷市域」、前掲辻岡「御料牧場・御猟場・鴨場—明治期における皇室と千葉県の関係史—」を参照のこと。
- (10) 『自明治十二年至同十五年 猟場録 主猟寮』。
- (11) 『自明治十二年至同十五年 猟場録 主猟寮』。
- (12) 『明治十六年 例規録 主猟寮』(識別番号1581)。
- (13) 前掲辻岡「連光寺村御猟場の公文書」。「自明治十四年至同十五年 例規録 主猟寮」(識別番号1580)。
- (14) 『自明治十二年至同十五年 猟場録 主猟寮』。
- (15) 『自明治十二年至同十五年 猟場録 主猟寮』。
- (16) 『自明治十二年至同十五年 猟場録 主猟寮』。
- (17) 『明治十六年 猟場録 主猟寮』(識別番号1580)。
- (18) 『明治十六年 例規録 主猟寮』。内務権少書記官藤沢親之発宮内書記官宛の七月二八日付文書(地三二五号)の中で、「本月十七日付御回答之旨了承、尚熟考致シ候ニ、如何様ノ方法ヲ以テ捕獲候ハ、御遊獵ニ必ス差支ナキヤヲ識別候ハ太タ難事」と述べられており、また、宮内卿から内務卿への七月四日付の照会案の中で「今般御定相成候江戸川筋御猟場之義者(平出)聖上ニモ折々 行幸可被為在苦ニ候処(中略)別紙図面黒線内ニ於平常鳥獵禁止之義各国公使ハ外務卿ヨリ夫々通知相成候様致度」とあることから、宮内省側が鳥獵禁止にこだわったのは天皇の行幸を想定してのものであったことが推測できる。
- (19) 『明治十六年 例規録 主猟寮』。
- (20) 『明治十六年 猟場録 主猟寮』。
- (21) 『明治十七年 猟場録 主猟寮』(識別番号1530)。
- (22) 『明治十六年 例規録 主猟寮』に所収の文書のカガミを時系列的に追っていくと、同九月十九日付のカガミまで「御遊獵場御用掛」と記されているのが、同二九日以降、「御猟場御用掛」に変わっている。
- (23) 『明治十七年 例規録 主猟寮』(識別番号1580)。



- (24) 『明治十七年 例規録 主猟寮』。
- (25) 明治十五年に選定された「御遊猟場」のうち、群馬県利根郡、埼玉県秩父郡、神奈川県足柄下郡には御猟場は設置されなかった。また、静岡県天城山への御猟場設置は明治三五年のことであり、「御遊猟場」からの名称変更と見るには時間が経ちすぎている。
- (26) 『明治十六年 猟場録 主猟寮』。
- (27) 明治六年一月制定の鳥獣猟規則（太政官布告第二五号）では、銃猟の禁止しか定められていなかった。地方長官が狩猟・漁業全般の禁止区域を設定できるようになるのは、狩猟が明治三五年十月五日制定の狩猟規則（勅令第八四号）、漁業が明治三四年四月十二日制定の漁業法（法律第三四号）制定以降のことと考えられる。
- (28) 『明治十六年 猟場録 主猟寮』。
- (29) 『明治十六年 猟場録 主猟寮』。
- (30) 『水戸市史 中巻 三』（水戸市、一九七六年）二〇六頁。篠崎佑太氏のご教示による。
- (31) 『公文録』明治十六年・第一六五巻・明治十六年五月〜八月・宮内省。以下、漁禁止をめぐる宮内省と内務省のやりとりは、すべて『明治十六年 例規録 主猟寮』による。
- (32) 本史料は草案であるが、文末に十月二十日の日付が朱書きで記載されている（記載は「廿五日」だが「五」の上に訂正印が捺されている）ので、同日に送付されたものと判断できる。
- (33) 『茨城県報』明治十七年二月十二日（茨城県立歴史館所蔵。請求番号E286）乙第二号。
- (34) 『明治十七年 例規録 主猟寮』。
- (35) 十六年に改正・作成された習志野原御猟場、江戸川筋御猟場の監守規則には、監守の役割として行幸の際の案内役という点が明記されている（習志野原御猟場は「御猟場監守規則」第三章「監守人心得」第四条、江戸川筋は「御猟場監守規則」第二章「監守人心得」第四条）。連光寺村御猟場の監守規則には上記のような規定は存在していないが、第一章「御猟場取締職務」第四条に「御沙汰ニヨリ侍従其他出猟ノ達書到達ノ節ハ最寄警察署ヘ其旨届出ヘシ、且各見廻人ヘモ相達シ置ヘシ」、第二章「見廻人心得」第六条に「臨幸之御達有之トキハ速ニ見廻人共申合御狩ノ順次取調、本場取締ヘ届出ヘシ」とあり、監守らが行幸や宮内省関係者の出猟時の実務を担う存在と位置づけられていたことがわかる。『明治十六年 例規録 主猟寮』。
- (36) 習志野原御猟場が明治十五年六月、連光寺村御猟場・江戸川筋御猟場が十六年十月にそれぞれ制定されている（『自明治十四年至同十五年 例規録 主猟寮（識別番号180）』、『明治十六年 例規録 主猟寮』）。
- (37) 大槻功『都市の中の湖 千波湖と水戸の歴史』（文真堂、二〇〇一年）四三頁参照。
- (38) 『茨城県史料 近代政治社会編Ⅰ』（茨城県、一九七四年）一二三頁。
- (39) 『水戸市史 下巻 一』（水戸市、一九九三年）七七八頁。
- (40) なお、『水戸市史 下巻 一』によれば、明治四年、水戸光圀と斉昭の像が偕楽園好文亭内の祠堂に祀られたという（同七頁）。
- (41) 『茨城県史料 近代政治社会編Ⅰ』一七頁。
- (42) 『太政類典』第二編・明治四年〜明治十年・第二六〇巻・教法十一・神社九。なお、『水戸市史 下巻 一』は六二名の願書提出を五年以来の運動の流れで説明しているが（九〜十頁）、出典が不明である。願書中に「今般特命ヲ以テ再ヒ御入県被為在、朝旨ノ趣及源義烈二公誠意ノ所在ヲ発明シ、積年派党ノ旧弊ヲ一掃シ候様御説諭被為在候」との記述があるので、筆者としては渡辺の説論を受けて出された願書であると考えたい。
- (43) 『水戸市史 下巻 一』三七〇〜三七二頁。
- (44) 以上、前掲大槻『都市の中の湖 千波湖と水戸の歴史』五三〜五七頁、『太政類典』第二編・明治四年〜明治十年・第二六〇巻・教法十一・神社九、『公文録』明治六年・第一〇九巻・明治六年一月・大蔵省伺（二）、『法令全書』明治六年。
- (45) 前掲大槻『都市の中の湖 千波湖と水戸の歴史』五六頁。
- (46) 松平俊雄編述『常磐公園攬勝図誌』上（北澤清三郎、一八八五年）、四丁。『都市の中の湖 千波湖と水戸の歴史』五六頁。
- (47) 『水戸市史 下巻 一』三七二〜三七三頁。
- (48) 以上、『三田寺家文書』（茨城県立歴史館所蔵）五一〜一三。
- (49) 北部東側の範囲は、文久年間に築かれた「新々道」となっている。「新々道」については前掲大槻『都市の中の湖 千波湖と水戸の歴史』四四〜四九頁参照。
- (50) なお、『図一』からは確認し難いが、「新道」東側の北側は「新々道」と呼ばれる湖面の道が御猟場区域の境界となっている。
- (51) 前掲『常磐公園攬勝図誌』上、三七丁。

- (53) 松平俊雄編述『常磐公園攬勝図誌』下（北澤清三郎、一八八五年）、一〇二頁。
- (54) 『明治廿一年至同廿五年 獵場録 主獵寮』（識別番号1531）。
- (55) 二一年三月に「御獵場御設置以来逐年鳥獸繁殖致シ、田畑ノ損害ヲ蒙ル者不少、人民ニ於テ苦情有之」ことを理由に各御獵場へ手当金が下付されることになったが、その決裁文書への添付資料には、栃木・埼玉・千葉・神奈川県知事からの住民苦情についての上申書が含まれる中、茨城県知事からのものだけを欠いている（『明治十九年至同廿一年例規録 主獵寮』（識別番号・1584））。
- (56) 「水戸鉄道之趣旨及沿革」（『香川敬三関係文書』【学習院大学文学部所蔵】751—30351）。なお、本史料を最初に紹介したのは川俣正英『「水戸鉄道之趣旨及沿革」を読む—香川家史料から探る茨城県鉄道史—』（茨城県近現代史研究）五、二〇二二年）である。あわせて参照されたい。
- (57) 水戸鉄道会社が計画した水戸—小山路線に対抗し、水戸—古河間の路線敷設を内閣に請願した常総鉄道会社の登場に対し、安田は長文の上申書を内閣に提出して水戸—小山路線を支持した（『茨城県史料 近代産業編Ⅱ』（茨城県、一九七三年）六二八—六三四頁）。
- (58) 土浦市松編『茨城県下水戸市街改正略図』（北澤清三郎、一八九〇年）参照。
- (59) 『茨城県史料 近代産業編Ⅱ』六二三—六二八頁。
- (60) 以上、『明治廿一年至同廿五年 獵場録』。
- (61) 『明治廿一年至同廿五年 獵場録』。
- (62) 『明治廿一年至同廿五年 獵場録』。
- (63) 『例規録』を見る限り、浦谷御獵場には御獵場規則の類も制定されていない。
- (64) 『明治廿一年至同廿五年 獵場録』。なお、本件は、二一年に農商務省が熊本県内に限り鶴獵を禁止する形で対応が図られたが、県側がそれ以前から宮内省に将来的な御獵場設定を含めた相談をしていたようである（『明治廿一年同廿二年 例規録 主獵寮』（識別番号1585）に熊本県から農商務省へ出された文書の写（その欄外に、上記の経緯があったため心得として写が渡された旨が朱書されている）、『明治廿一年至同廿五年 獵場録』には、農商務省へ禁獵解除を上申するに先立ち宮内省の見解を照会する文書が綴られている）。
- (65) 『明治廿一年至同廿五年 獵場録 主獵寮』（識別番号1533）。『山

口正定日記 明治廿年八月九日至明治廿一年十一月十八日』（宮内庁宮内公文書館所蔵。識別番号37328 明治二十一年十一月十八日条。

- (66) 池田さなえ『皇室財産の政治史』（人文書院、二〇一九年）参照。

# 《付記》

本稿作成にあたっては、茨城県立歴史館、学習院大学文学部、宮内庁宮内公文書館、水戸市立図書館にお世話になった。記して感謝したい。なお、本稿はJPS科研究費JP20K00966の助成を受けたものである。